出品目録

第四十一回

京都工芸美術作家協会展

THE 41ST
KYOTO KOGEI
ASSOCIATION EXHIBITION

会 期:令和4年3月8日(火)—3月13日(日)
会 場:京都府立文化芸術会館

京都工芸美術作家協会 で検索
http://kogei.kyoto/

京都工芸美術作家協会・京都府

京都府

第41回京都工芸美術作家協会展.indd 1-2 2022/02/25 9:00

ごあいさつ

京都工芸美術作家協会は昭和21年に設立され、工芸美術のさまざまな分野の作家が公募展や会派の垣根を越えて集まる、文化の地、京都ならではの稀有な団体です。

京都工芸美術作家協会展は、昭和51年度に初開催し、今回が第41回展となります。

京都の第一線で活躍中の染織、陶芸、漆芸、金工、人形、ガラス、木工、七宝などの多様な分野の作家の作品を御覧ください。

近年は海外からの招待を受け、2017年、2018年には上海の展覧会に協会として参加、昨年秋には東京の松坂屋上野店にて「京都工芸美術作家協会展＠東京―京都が、ＫＯＧＥＩする―」と題して、文化庁の御支援を受けて開催した展覧会が好評を博しました。

今後も、積極的に京都の工芸美術を国内外に伝え、日本の文化芸術の振興に寄与できればと願っております。

結びに、このような時節に最大限の配慮を重ねて、無事開催の運びとなりましたこと、御協力いただきました関係各位に心から御礼申し上げます。

京都工芸美術作家協会　理事長　羽田　登

ごあいさつ

京都は、長い歴史と豊かな文化的風土を背景に多彩な文化芸術を育み、その伝統を現代に受け継いでまいりました。なかでも、美術工芸はその時代の新しい技法を取り入れ、伝統と現代を融合させながら発展してきました。

京都工芸美術作家協会におかれましては、昭和21年の創立以来、部門や会派を超えて工芸美術の振興と発展を目指す作家団体として、染織、陶芸、漆芸、金工、人形、ガラス、木竹、七宝など、多岐にわたる分野の作家が集まり、京都のみならず日本の工芸美術の発展に多大な貢献をされているところであり、羽田理事長、歴代の役員はじめ会員の皆様方の御熱意と御努力に深く敬意を表します。

本展におきましても、会員の皆様の卓越した技術と感性に裏付けされた個性豊かな作品が多数出展されており、それぞれの多彩な表現や意匠に施された美意識を存分に感じ取っていただけることと存じます。

京都府といたしましても、コロナ禍を乗り越え、感染拡大防止と社会経済活動の両立を図っていくとともに、京都へ本格移転となる文化庁とも連携し、工芸美術をはじめ日本文化の魅力を国内外に発信してまいりますので、引き続き皆様方の御支援を賜りますようお願い申し上げます。

結びに当たり、京都工芸美術作家協会のますますの御発展と、会員の皆様の今後ますますの御活躍を心から祈念いたします。

京都府知事　西脇隆俊

第41回京都工芸美術作家協会展.indd 3-4　2022/02/25 9:00

出品リスト

染　織

赤塚　佳子　「また、会う日まで」
安芸　和美　「懐想」
朝倉美津子　「滝雫」
足立　昌澄　友禅訪問着「雪中松」
阿部　　緑　「追想」
阿部　百子　「湿原の景」
荒井利恵子　「夜話」
荒谷いずみ　「誘引」
伊砂　正幸　「Solar」
伊砂　新雄　「輝き」
伊藤　千晶　「クリスマスローズⅤ」
井上　由美　「Changing Faces」
井隼　慶人　「菜の花月」
上原　晴子　「清茜」
荻野美穂子　「花賛歌」
小田　芽羅　「萌動」
加藤　由起　「苗族の女」
金井　大輔　「記憶の風景」
河崎　晴生　「information」
川辺美津子　「憂愁」
北島　桂子　「のぞみ」
日下部雅生　「剱　―シャンバラを征くー」
久保田繁雄　「Rainbow Fall M-Ⅰ」
小林　祥晃　「精風」
近藤　卓浪　「葉っぱに星屑」
斎藤　高志　「待春」
堺　　映祥　「春来」
佐藤　良三　「交錯する思考」
澁谷　和子　「松菱」
嶋田久美子　「Harmony　vol.2」着物
清水　弘祥　「夜明け」
白河　英治　「雲海山岳」
髙谷　光雄　「仲間たち」
竹花富美子　「空へ」
田中　紀子　「波のカタチ」
谷　美巴子　「幻影」
谷野　吉冬　「投影」
丹下　雄介　「額紫陽花」
寺島　利男　「光の輪」
内藤　英治　藍型染額「藍獅子舞」
中井　貞次　「展望」
中未田万里　「墨染の朱花」
中西　秀典　「永久の輝き」
野田　睦美　「原初の創造」
羽田　登喜　染名古屋帯「春の色」
羽田　　登　染名古屋帯「秋」
樋上さや子　「窓辺」
樋上　千哲　「紅い華」
平谷悠律子　桜染絣織着物「風に舞う」
細見　　巧　「流」
本田　昌史　「やみつきのキモノ No.2」
松本　健宏　「送迎ノ帰リ」
三原サダ子　「想」
宮下　典子　「は～るよ こい」
山出　勝治　「火床から（大文字）」
横山喜八郎　「蔦沼晩秋」
吉田　匡廣　「しだれ桜」
吉水　絹代　「明日は晴」

陶　芸

猪飼　祐一　「灰釉紅彩壺」
市川　博一　「刻」
井出　照子　「層位」
稲澤　隆生　「涼炉揃い」
井上　路久　「風景」
今井　眞正　「泰平の兆」
今井　政之　「白砂瓷象嵌　薮手毬花瓶」
上田　順康　「天へノ剣」
永樂　而全　「緑彩竹根　花入」
江口　　滉　「藿」
江副　嘉信　「シーグラスの香炉」
塩冶友未子　「無題」
岡山　高大　「泡文金彩鉢」
小川多佳子　「香炉“昇龍”」
小川　文齋　「透ける ー和と輪ー」
奥村　博美　「緊縛ノ壺」
片山　雅美　「赤い陶」
加藤　　敬　「線刻紋器」
加藤　丈尋　「緋雨花器」
河合　徳夫　「白牡丹」
岸　　映子　「石の種」
北村　美音　「西陣“カフェ天久”のお姉さん」
京谷　美香　「くものいと」
清水六兵衛　「記憶の塔 2022」
國松　万琴　「本の塔」
久保　良裕　「カンブリア：ラストワン」
桑原　紀子　「花器」
慶野ことり　「untitled」
髙坂嘉津幸　「Landscape」
小林　英夫　「暁光」
近藤　知子　「呉須泥彩花器」
桜井　智子　「幾何学文様皿 ー妖ー」
櫻井　靖子　「球」
柴田　良三　「線象嵌染付平鉢」
杉瀬　公美　「鉄絵山帰来文花器」
髙野　好子　「白土葉紋彩器」
武田　直之　「花奏」
竹中　　浩　「染付椿文角皿」
竹村　繁男　「灰釉壷」
竹村　智之　「天空の虹」
谷口　正典　「稜」
谷口　良孝　「光のカーテン」
丹下　裕史　「眩器」
張　　義明　「天空」
辻　　勘之　「練込鶉手壷」
堤　　展子　「春になるとカエルが鳴きだす」
トレーシー・グラス　「宇宙の細胞 酒器」
中塚　佐一　「深海の遊泳」
西岡みどり　花入れ「四方」
西川　　勝　「馬と人の関係」
西川　光男　「刻の記憶」
西川　　實　「礁華紫彩 盤」
西村　徳園　「青金彩　瓢形　花入」
長谷川惠美子　「芽ぶき」
林　　侑子　「花鋏大皿」
ピーター・ハーモン　「無窮陰陽彫刻白磁壷」
昼馬　和代　「融合」
福田　参平　壷「白地白泥掻落花文」
藤野さち子　「変容 '22」
藤平　　寧　「ＵＦＯ」
伯耆　正一　「刻土 花器」
丸田　憲良　「熔」01
水野　靖之　「時の器」
宮下　英子　「波條紋　器　気宇」
森本　真二　「玄燿」
山本由紀子　「刻まれた沈黙」
横山真理子　「白点結晶雲上組鉢（５枚）」
吉川　　充　「赤い絵の器」
吉田　里香　「きざし」
吉村　楽入　「赤四方水指」

漆　芸

伊藤　裕司　「竹ノ図蒔絵 丸盆」
井上絵美子　「芽吹き」
岡田　紫峰　耀貝蒔絵小筥「野風」
岡田　嘉夫　「木地蒔絵箱」
川浪　康男　「誕生」
栗本　夏樹　「森の記憶 A」
笹井　史恵　「藍洞ー翠」
中西　宏明　「宙」
中野　順二　「漆筥 海の宝」
服部　一齋　栃拭漆蒔絵螺鈿飾立体「時つ風」
林　　玖瞠　「物語・再開」
三木表延斎　「花鳥漆絵 箱」
宮木　　康　「日常」
村田　好謙　「神使」
望月　玉船　「自然の鼓動」

金　工

今井　裕之　「コスモス通信機　２号機」
海野　雲雄　「銀金彩壺」
桶本　忠弘　「鯱」
中村　佳永　「南鐐 網桜 急須」
向井　弘子　「華」
山本　啓二　「欠伸」

人　形

天野　明美　「慧日」
岡　　弘美　「春へ」
島田　耕園　「月の影」
大黒ひさゑ　「小鳥」
面屋　庄甫　「ゆくえ」

ガラス

黒田　敬子　「風の記憶」
徳力　竜生　「IMAGINE」
林田さなえ　「Flow」
光久　弘子　「静寂の朝」

木　工

角田　誠治　「寄木屏風」
村山　　明　「欅拭漆高盛器」

七　宝

松本由紀子　「蓮の池」

石　宝

ぐり　友里　「甘粒の宝」

鑑賞の手引き

染　色

現代の染色工芸は多様な表現方法がある。布に図を染める方法として主に防染と捺染に分けられる。防染では糊染、蝋染、絞り等があり、糊染めは東洋独自の染色で、糊を防染に用い、手描き、型染がある。蝋染は絞りと共に古代より世界各地に見られ、絞り染は布や糸をしばる事による防染法である。捺染は糊に染料を加えて染色する方法であり、シルクスクリーン型、型染、手描等がある。

最近は染料や染色素材が多様化し、技法も複合化し、表現者の独創性が見られる。

織

経糸と緯糸が交わって作られる織は、糸を染めてから織る、いわゆる先染が多い。織ることは単純であるが、そこから無限の可能性を含んでおり、綴、絣、紬織などの織がある。現代の織は、織る、組む、編む、絡めるなど以外の技法も使われ、素材も多種多彩である。その表現も平面のものから空間のための造形まで、多岐にわたっている。

陶　器

陶土は山野から直接採掘精製した粘土である。それを原料とし、成形、焼成する。一般に素地は耐火性が強いため、焼け締まりが弱く、したがって吸水性があって不透明である。唐津・萩・益子・信楽・越前・常滑・瀬戸・丹波・薩摩など、産地名によるもの、また、志野・織部・黄瀬戸・天目等、釉薬の種類によるものや、作者が独自に開発した技法もある。展示されている作品には、このような伝統的手法を踏まえ、独自の創意を盛り込んだ個性的なものが多い。

磁　器

原料となる磁土は流紋岩が熱水により変質した陶石を微粉砕し、水を加えて粘土状にしたものである。それを原料に成形するその特徴は、主として素地は白く、半透明で、陶器にくらべて堅く、吸水性がなく、叩くと金属音を発する。代表的な製品には、染付・青磁・青白磁等がある。

漆　芸

漆の木から採取する樹液が“漆”である。精製された漆は、堅牢で美しい天然の塗料であり、同時に優れた接着剤である。この二つの性質を最大限利用して漆工芸品が創り出される。漆工芸は、木・竹・紙・布・皮・金属・陶器などを素地として、これに塗装と加飾を施す。古来、素地に木材を使うものを木胎、竹を籃胎、紙を一閑張、皮を漆皮、布を乾漆、金属を金胎、陶器を陶胎と称する。主な種類は、髹漆・蒔絵・彩漆・螺鈿・平脱・彫漆・蒟醤・存星・沈金等である。

金　工

金属工芸品を大別すると、彫金・鍛金・鋳金の作品にわかれる。

〈彫金〉

彫金は金属表面に鏨で文様を彫ったり、透かしたり、他の金属を嵌めたり、レリーフとして打ち出したりして加飾する技法である。その技法の中には、毛彫り・蹴彫り・片切彫り等がある。

〈鍛金〉

鍛金の技法を大別すると、鍛造技法・鎚起技法・絞り技法である。鍛造は、赤熱された鉄材を鎚で展伸して形成する。鎚起の技法は、打ち上がった地金を木型の中に打ち込み碗状にし、次に金床の上で鎚打ちし、成型していく。絞り技法は材料を当て金に当て、金鎚で鎚打して絞り込みながら成型する方法である。

〈鋳金〉

溶解した金属が注ぐ容器、即ち鋳型通りに固まるということを用いたのが鋳金技法である。はじめから金属を加工するのではなく、木・粘土・石膏・蝋等で原型をつくり、これをもとにした鋳型に溶解した金属を鋳込むのである。

木　工

木工は、針葉樹、広葉樹、唐木等の素材を用い、その素材の硬軟、疎密、色の濃淡、木目の有無等を考慮し、制作意図に合った技術により作られる。基本的な技法は、指物、刳物、挽物、曲物、彫物（丸彫・板彫・透彫）、木象嵌（木画・寄木）等に大別されている。

竹　工

現在、竹工芸に用いられている竹は、真竹・女竹・黒竹・寒竹など20種類ほどである。籠の編み方は、六ッ目編みである甲羅編み・四ッ目編み・甲羅編みをくずして三角編みにした鱗編み、あぜくら組などがある。編み上がったものを植物染料により着色することもあるが、漆を用いて着色することが多い。

人　形

人形は素材的に多様で、土・木・紙・桐塑・布などが自由に用いられる。これは、使用している素材や使用目的で分類されている他の工芸と大きく異なる。今日では、金属やプラスチックなど様々な素材が使用される。

和　紙

和紙の原料は、楮・三椏・雁皮が主に使用され、代表的な製法は溜漉きと流し漉きの二種類がある。

硝　子

ガラスは珪砂・鉛丹・ソーダ・カリ・アルミナなどの原料を1300℃前後の熱で溶かし、成型、加飾する。成形、加工法は、宙吹き（吹きガラス）、キャスト、パート・ド・ヴェール、フュージング、スランピング、バーナーワーク、ランプワーク、積層ガラス、ステンドグラス、カットガラス、サンドブラストなど様々で、複合的に使い分ける。種々の色ガラスは、ガラス工芸を一層華麗なものにしている。

七　宝

七宝は、主として金属素地にガラス質の釉薬を800℃前後で焼きつけながら装飾する技法のひとつである。技法では有線七宝と無線七宝があり、使用する釉薬も不透明・透明・半透明釉、また、金属素地に彫金あるいは切り透しなどの加工をして釉薬を焼付けるなど、技法は多様である。

截　金

截金は金箔やプラチナ箔を数枚焼き合わせ、細長い線状に竹刀で一本ずつ截り、膠液に布海苔を入れて糊を作り、素地である木、絹地、和紙、漆器、陶磁器、硝子などに、直線・曲線を描くように置く技法である。丸形や菱形など様々な形に切ったものも用いる。仏像彫刻をはじめ、宗教美術、茶道具、室内装飾品、装身具などに見ることができる。

砡

鉱物そのものを素材とした造形を砡彫刻と呼ぶ。素材は多岐に及び、水晶、紫水晶、紅石英、瑪瑙、玉髄、碧玉・赤玉石など石英という鉱物がよく使われる。他に翡翠、ラピスラズリ、トパーズ、アクアマリン、トルマリン、ネフライト、蛍石など多岐に及ぶ。成形にはダイヤモンドや炭化珪素など硬い素材でできた研磨材や、グラインダーやリューター、細工台など回転工具が使われ、仕上げにはダイヤモンドのほか酸化クロムや弁柄等で磨き上げられ、宝石としての耀きを得る。

革

現代の革工芸は、革のもつ強靭性・柔軟性・弾力性等の持ち味を生かし、染める・切る・よる・編む・レリーフ等様々な技法が駆使されている。

工芸美術の技法や素材の
詳しい解説はコチラから